

# 平成二十九年十一月の收穫

土屋 博

## 一 「中等教育 作文法」 萩野由之著

(博文館、明治二十五年刊、正價金七拾錢、四八八頁) 古書價格五百圓也。著者萩野由之(一八六〇年生れ、一九二四年歿)は東京高等師範、東京帝國大學教授を歴任。本書の目次は、總論、普通文、書牘文、和文、漢文より成る。たとへば、和文の文例として、「納涼」(紫式部「寢殿の東おもて・・・」及び清少納言「いみじう暑き頃夕すゞみといふほど・・・」)、「地震」・「火災」(鴨長明)、「大井川行幸和歌序」(紀貫之)、「源義朝父を弑せしことの論」・「北条氏の論」(源親房)、「節儉の論」・「交際を論ず」・「家の作りやう」(吉田兼好)、「古言と字音と同じきものゝ辨」(本居宣長) など収録す。

## 二 「大増補 中等教育 作文教科書」 近藤元粹著

(明治三十二年四十八版、本文四五九頁十補遺七一頁十附録一一二頁十作文要旨八五頁)

古書價格八百圓也。初版は明治二十二年。四十八版と版を重ねたる當時のベストセラーなり。著者近藤元粹(一八五〇年生れ、一九二二年歿)は伊豫出身の漢學者、大阪にて風騷吟社を設立したる人物なり。卷之上の目次は、時候簡牘門、日用尺牘門、游記門、序門。卷之下の目次は、説門、祝文門、傳門、紀事門、紀戰門、銘門、贊門、書後題跋門、祭文。傳門の例を擧ぐれば、閻龍彪斯(コロンブス)、李鴻章、比斯馬克(ビスマルク)、華盛頓(ワシントン)、拿破崙(ナポレオン)、黒田伯、伊藤伯、西郷伯など。

## 三 「近世儒學史」 久保天隨著

(博文館特製、明治四十年刊、定價金五十五錢、三四六頁) 古書價格三百圓也。本書を購入するは二度目なれど、今回は特製本なり。竝製本は遠距離通勤の頃二度讀了したれば愛着を感ず。

## 四 「作文良材 美辭寶典」 西村眞次著、大町桂月序

(文武堂、明治四十二年十九版、正價金三十五錢、三九六頁) 古書價格千圓也。初版は明治三十五年。たとへば、平成三十年の干支の戌にちなみ、犬の美文例をみるに、「霜ふる夜半を門守る犬の如何にわぶらむ」、「狩犬のするどく吠ゆるは得物や獲たる」など。韻文例、「盗人ねらふ窓の外 聲をかぎりに犬吠えて 霜ふる夜半を風吹きぬ」。

## 五 「國民歌集」 東京帝國大學文科大學講師佐佐木信綱編

(民友社、明治四十二年刊、定價金壹圓、本文二四八頁) 古書價格五百圓也。神武天皇(紀元七六年崩御)の「神風の・・・撃ちてしまむ」より、福羽美静(明治四十年歿)の「國のため思ひかためしわが心玉とみがきて世を照らさばや」まで、忠君愛國の至情をうたへるものを一卷となす。徳川光圀は、「立ちならふ山こそなけれ秋津洲わが日の本の富士の高嶺に」。岩倉具視は、「勅なれば髪は切りもしそりもせむ清き心は神ぞ知るらむ」。勝安房は、「わが命あらむ限りはこの民を救はむと思ふこゝろたゆまじ」。

## 六 「近古史談原文集」 大槻文彦編

(嵩山房、明治四十三年刊、定價洋裝六十錢、二二七頁) 古書價格三百圓也。大槻盤溪(一八〇一年生れ、一八七八年歿)の「近古史談」は明治十四年に漢文教科書に採用せられたる處、息子の大槻文彦(一八四七年生れ、一九二八年歿)、近古史談の據れる原文を此處に纏む。

七 「新體文範」文學士大町桂月著

(大倉書店、大正元年八版、正價金六十五錢、三六二頁) 古書價格二百圓也。初版は明治四十年。二度目の購入。序より、「自から作れる文章を集めて文範と名乗るは烏訶がましきの限りなれど、大方の識者許されよ、われは名文家にこそはあらざれ、初學の青年に比すれば一日の長あり。茲にそれらの人の爲めにしばし師たらむとするなり」と。敘事文、抒情文、議論文に別る。

八 雜誌「實業之世界」秋季特別號

(實業之世界社、大正二年十月刊、定價金二十五錢、一八四頁) 古書價格千五百圓也。

第一特集は「海外發展策」六十餘頁。その冒頭論文「言忠信行篤敬」にて澁澤榮一曰く、「國民の期待は何處迄も果す勇氣を以て、而して能ふだけの耐忍を以て、大和民族の世界的發展の途を開き、何れの地方でも厭がられ嫌はれる人民とならぬやう心懸ることが、即ち發展の大要素であらうと思ふ」と。第二特集は「日本の缺點論」七十餘頁。「堅忍不拔の資質を缺く日本人」(大木遠吉伯爵)、「日本人は他國人と融和し難き缺點あり」(和田垣謙三東京帝大教授)など。特集以外の記事中、幸田露伴の「過程の短縮」は興味深し。人は未だ長ぜざる時には時間の思想は殆ど無きに近けれど、壮より老に及び時間を尊重するに到る。世上最大有力のものは時間とさへ云ひ得べし。文明といふことは人事の過程の短縮なりといひて差支へ無し、と。

九 「近世儒家人物誌」村松蘆洲編

(金櫻堂、大正三年刊、定價金壹圓、五二九頁) 古書價格三百圓也。天金。文學博士井上哲次郎、序文に曰く、「未だ一人の儒家人名辭書を編纂するものあらざりき。豈に之を學界の一大缺典と謂はざるべけんや。・・・君の此の書中に收載する所は實に一千二百三十有餘名の多きに及べり」と。

十 「作法文範 文章大觀」大町桂月校閱批評、馬場峯月編纂

(帝國實業學會、大正五年十六版、正價金貳圓八拾錢、本文八七〇頁十附錄作文辭典二六六頁) 古書價格千圓也。初版は大正元年。三宅雪嶺の序文より、「春夏に樂觀し秋冬に悲觀するは詩歌に見ゆるの多し。平素特別の感想なきも時として中に動く所あり。而して外と相ひ應じ樂愈々樂、悲愈々悲、更に轉輾進遷して、樂中悲を生じ悲中樂を生じ、一種美的の性質を帶ぶるに至る」と。目次は大町桂月作文十則のあと、緒言、第一編記事文、第二編論說文、第三編抒情文、第四編儀式文、第五編書翰文、第六編女用文、第七編演說集と續く。附録として作文辭典(修飾篇、解釋篇、用字篇)あり。

十一 「大正一萬句」今井柏浦編

(博文館、大正七年四版、正價金七拾錢、四〇二頁)

古書價格千圓也。凡例によれば、「本巻收載する所は子規系統に屬する全國同人の作に係り其の材料は明治四十四年六月より大正四年六月に至る「ホトトギス」を中心とし、「日本及日本人」、「太陽」等の諸雜誌、「國民」「東京日日」「大阪朝日」、「大阪毎日」、「京都日の出」の各新聞より蒐集せる數萬句中より更に編者が優秀なりと認めたるもの約壹萬餘を收録してこの一卷を成す」と。冒頭の句は、新年の部天文の「屯田百歩我が事足れり初日影 桃孫」。

十二 「書畫鑑定必携 儒家小誌」渡俊治編

(文求堂書店、大正十四年再版、定價金貳圓、本文三九八頁十附錄・索引) 古書價格二百圓也。初版は大正十一年。凡例より、「予常に古儒の人格今人に優れたるもの多きを思ひ、其の書畫を得て古儒崇拜の一端とせんとし、之が蒐集に従事すること多年、傍ら儒者の傳記逸話等を見るに隨ひ聞くに隨ひて

之を抄録せるもの、積んで数千枚に達せり」と。いろは順、伊藤仁齋より進梅亭まで。姓、號、名、字、生地、歿年、享年、師名、備考を記す。

(平成二十九年十二月十八日受附)